

お墓の前に座り込み、手を合わせた。

彼女は死んだ。でも、彼女の死は辛いものではないかもしれない。

夏には人殺しが良く似合う。私は彼女を、殺したかった。

お遊びで創作やってる奴らの末路を知ってるか？ 孤独だよ。

自分が作った作品を買ってくれるのは身内だけ。それでも満足しちゃう奴らの心には何がある？ 自己満足だよ。まさにお遊びだろ？ 信念も何も無い。

仲間内で慣れ合って、褒めあって、自分の作品に触れてくれるのは身内ばかり。それでも満足しちゃって、色々勘違いするお遊び感覚の奴らが最近多すぎる。そういう奴らは気づかないんだ。お遊びじゃ上に行けないって事にね。

仲間内だけで完結する創作は創作とは言わない。それはただのままごとだよ。作品は赤の他人に認められて初めて価値が出るもんだ。仲間内で慣れ合う事に満足してる奴ってマジでイカれてる。早く死ねよ。

奈々ちゃんは昔、こんな事をぐだぐだと語っていた。

私の手には一冊の小冊子がある。昔の友達が掻いた漫画。描いたはいいものの買ってくれる人がいなくて困ってる、少しでも売りさばいてコストを回収したいとかほざきだして、しょうがなく買ってあげた。舞台やライブのチケットを買わされるみたいなものだ。

彼女は漫画家になるのが夢だった。夢を目指して漫画を描き続けていたで、諦めた。

部屋の整理をしたら出てきたこの漫画を、私はどうするべきだろうか。捨てれば良い？ そう、捨てるべき。でも、なかなか捨てられない。

漫画家を目指している時の彼女は輝いてみえた。仲間も沢山いた。その仲間と同じ漫画家志望の人たちだった。

いやあ、本当に、輝いていましたよ。漫画家志望の仲間が集まって、励ましかって、褒めあって、漫画家になる事を夢見ていた彼女たちは。

でも、漫画家になれた奴は一人もいない。信念が足りなかったのか、それともバカだったのか。それは分からないけど、とにかくみんな漫画家になる夢は諦めた。

なぜ彼女たちが輝いてみえたのか。夢を持って生き活きてたから？ いや、違うね。

みんな、孤独じゃなかったから。

八月三十一日。友達の千瀬奈々が仕事で東京にやってきた。私は彼女を家に

招いた。奈々ちゃんはリビングの白色のソファアームにどっかりと座り込んだ。私はテーブルを挟んで反対側に置かれていたソファアームに座った。テーブルの上には灰皿だけがぼつりと置いてある。しばらく電源を付けていないテレビには埃が目立ち、壁にかけられているコルクボードには紙切れ一つない。

「いやあ、疲れるわ。なんでくっだらねえ日本の映画のくっだらねえ宣伝のためにさあ、わざわざ東京に来なきゃいけないんだよ。あの映画はダメだ。絶対人気でねーよ」

奈々ちゃんはソファアームに横になり、短いスカートからパンツ丸出しになっても気にせずにしゃべり続ける。

「なあ、りこ。やっぱ人間って才能だよなあ？ 才能無い奴が何かを作り出してもな、誰も得しねーんだ。儲からないし、その作品に触れた奴は時間を損するだけ」

「まあ、そうだよな」

私はあの漫画の事を思い出した。確かにあの漫画は面白くなかった。読んだ時間を返して欲しいと思った。

奈々ちゃんは寝転がりながらタバコを吹かしている。彼女は美人だ。スタイルも良い。頭は悪いけど脳みその回転は早い。気さくで裏表がない。こういう人間が漫画を描いたら一体どうなるんだろうか。

「ねえ奈々ちゃん」

「あん？」

「芸能人って、楽しい？」

奈々ちゃんは「よっこらせ」と言いながらベッドに座り直し、タバコの灰を灰皿に落とした。

「わかんねえよ、そんなの」

「分からないのにやってるの？」

「自分に出来る事をやってるだけ。美人に産まれて本当に良かったよ。笑ってるだけで金が入ってくる」

私はなんとなく、あの漫画の話がしたくなった。そしてタバコが吸いたくなかった。

「奈々ちゃん」

「あ？」

「タバコ」

奈々ちゃんがセブンスターを一本投げて寄越した。そして小さく笑う。

「私の事、奈々ってよばねえの？」

「やっぱり慣れなくて」

「ふうん。で、なに？」

「……これ」

私はテーブルの引き出しから漫画を取り出して奈々ちゃんに手渡した。

「何これ。漫画？」

「同人」

「へえ。誰が描いたの？」

「昔の友だち。買わされたんだ」

「なるほどね。で、その友達は今も漫画描いてんの？」

「それはまだ秘密。とりあえず読んでみて」

奈々ちゃんはタバコを灰皿でもみ消してページを開いた。そして二、三ページほど読んだ所で、漫画を放り投げた。白色のカーペットの上に漫画がぺたりと着地する。

「ゴミだな」

「どんな所が？」

「絵が壊滅的に下手。最初の入り方が面白くない。ゴミだよ、これは」

「でもね、この漫画を描いた来は、自分がプロになれると思ってたんだよ」

「ふうん。今そいつは精神病院にいるの？」

「……なんか、毒舌だね。いつにもまして」

奈々ちゃんはため息をついた。

「自分の力を過信する。それほど愚かな事はないよ。この程度の力しか無いのにプロを目指すなんて、色々と社会を舐めてるよ。りこの友達だろうがなんだろうが、そういう奴は許せない。プロの世界で生きる事がどれだけ辛いのか、それを理解すらしていない。ありえないね」

私はやつとタバコを口に啣えて、ライターが無い事に気がついた。奈々ちゃんがライターをこつちに投げる。それをキャッチして火を付けた。

「……なありこ。なんでいきなりこんな面白くない漫画見せた訳？」

「捨てるかどうか悩んでる」

「捨てるよ」

「そうしたい。でも捨てる気になれない」

「なんで？」

「なんでだと思おう？」

「……いや、知らねえよ」

「奈々ちゃん」

「あん？」

「一緒に来て欲しい所があるんだ」

私は奈々ちゃんと一緒に墓地へ来ていた。私は「昔の友だち」のお墓の前に座り込んでいた。手には彼女が描いた漫画。

奈々ちゃんはあめ玉を舐めながら突っ立っている。私は呟いた。

「この漫画を描いた子のお墓。享年二十五歳」

「……なんで死んだの？」

「自殺」

「……」

「そこそこ、仲良かったんだよ。だから漫画も買ってあげた。面白くない漫画だけど、捨てられなかった」

「……ごめん」

「……でも、捨てた方が良かったって思ってる」

「大事な思い出だろ？」

「夏には人殺しが良く似合う」

「は？」

「夏って、色んな事が終わるでしょ？」

「何が言いたい？」

「私は、私の中にいるこの子を殺すべきだと思ってる」

「なんで」

もう風は冷たかった。私は漫画を開いた。下手くそな絵。才能の欠片も感じられない。

私は彼女を殺すべきではないだろうか。いや、この漫画を捨てて、彼女を殺したい。

だって……。

もしかしたら、彼女にとってこの下手くそな漫画は、恥かもしれないから。

この漫画を恥だと思っていけないなら、彼女はまだ生きていたはず。私はそう思う。

「この子が自殺する一週間前ね、会ったんだ。居酒屋でお酒飲んだ」

「……」

「で、別れ際に言ってたんだ。……漫画家なんか目指さないで、別の道を目指してれば良かった。時間の無駄だったって」

奈々ちゃんは私の手から漫画を取り上げた。そして無表情にページをばらばらとめくった。

「……りこ」

「うん？」

「お遊びで夢を追いかける奴らの末路は、孤独だ」

「……」

「そうでしょ。お墓は孤独」

「……うん」

「だけどね」

奈々ちゃんは小さく笑って、漫画を私の頭に優しく置いた。

「勝手に他人を孤独と決めつけるのは良くないね」

「どういう事？」

「奈々ちゃんはあめ玉をガリッと噛み砕いた。」

「……この漫画のストーリーリー考えたの、アンタでしょ？」